

奨励賞

〔自由作品〕

## 約束の順守と弟子の昇格

大勝勝

三月の金曜日、業後に、製造部の社員六十人余りが金沢市内の一流ホテルに集合した。控室にいた倉田丈二は、若手の女子社員に先導され、大ホールに入場した。参加者の大きな拍手を受けながら、指定された席に着いた。ホールの正面には横書きの大きな字で〈定年退職祝賀会〉と書かれたボードが掲げられていた。彼は中肉中背で穏やかな顔立ちだ。

大手機械製造会社の有力な協力会社として、光洋電気工業は安定した業績を上げていた。そこは金沢市の産業団地にある中企業で定年は六十二歳だ。

倉田に続いて、少し小柄でひょうきんな感じの大沼信吾、やや長身で囲碁とバスツアーが趣味のインテリ風な白井啓也も入場した。三人共、母校は異なるが工業高校卒で主任クラスだった。幹部候補生を自覚していたが、技術向上に打ち込み、仲が良かった。

定刻になると、部長がステージで挨拶し全員ワインで乾杯し

た。その後、数人の課長クラスから、定年まで健康に留意しながら業務に精励し、会社に大きく貢献して勤め上げたことを称え、感謝し、祝福する内容の言葉があった。

次いで退職する主賓の挨拶になった。倉田はちよつとした失敗談も交えて簡単に経歴を話してから、

「もう十二分に働かせて頂きましたので何も思い残すことはありません。これでやっと近隣の年金生活者の仲間入りが出来そうです。これからは次の上司の下でキッチンの業務に慣れたいと思います。長い間本当に有り難うございました」

と結んだ。続いて大沼と白井もユーモアに富んだスピーチをし、会場が沸いた。

ひと時の歓談の後、有志による余興が始まった。カラオケ、民謡、相撲甚句、ダンス、ギター独奏など意外な隠し芸が披露され、喚声が上がった。特技を持つ社員には、格好の発表の機会となったようである。

終盤になると、三人に部長から記念品と、女子社員から花束が贈呈された。引き続いて集合写真が撮られた。最後に全員が二列になって向かい合い、両手を上げてアーチを作った。その下を、白井、大沼、倉田の順に潜り抜け、「ありがとー」「お疲れさまー」などと声を掛けられながら退場した。

倉田がロビーに出ると、還暦を迎えたばかりの妻の久子が駆け寄ってきた。彼女は倉田より僅かに背が低く色白で愛くるしいルックスだ。

「お父さん、無事定年おめでどう」  
「お母さんのお陰だよ、有り難う」

久子は駐車場に止めてあった、彼女の赤い愛車の運転席に乗り、倉田は花束を後部座席に置いて助手席に着いた。

もう会社へは行かなくても良い、いや入れないのだ。長年の通勤の習慣が終了する。多くの仲間と会えなくなる。そのような寂しい心持ちは一、二割あつたらうか。あとの八、九割には、就職以來、初めて仕事をしないで暮らせる、自由気ままに時間を使える、第二の人生に明るい希望を抱いていた。

三年前に長女が嫁ぎ、県内で家庭を持つている。一年前に長男が結婚し、隣町に居住している。倉田は久子と金沢市の郊外で二人暮らしだ。

倉田が定年退職を意識し始めたのは四年前だった。その頃、七尾市にある、光洋の温泉付き厚生施設の研修室で一泊二日の「ヘアイフプランセミナー」を受講した、聴講者は光洋全社の五十八歳の社員九名とその配偶者の計十八名だった。

このセミナーで倉田は大沼と白井の細君に初めて対面した。大沼敏江には久子と、どことなく似た雰囲気を感じた。上品で健康的に見えた。久子と同一年だそう。白井貴子は均整の取れた体

付きで、あか抜けしていた。

講義は人事部の担当者や社外講師でテキストに従って進められた。退職金・厚生年金・失業保険の概算計算法、定年後の余暇活動・健康管理・家庭経済プラン・生きがいとライフプランなど興味深い内容だった。

成程と印象に残ったのは、

「生きがいのある生活に大事なものは、没頭出来る趣味がある、利益を度外視した仕事がある、家族の仲が良い、社会とつながりがあることで、これらを支えるのが健康とお金です」  
というくだりだった。

倉田は以前から陶芸に関心を持っていたので、定年二年前から暇を見付けては金沢市内にある会員制の陶芸教室に出向いた。数箇月で基礎コースを修了し、その後自由制作を試みた。土に触れ、土と遊ぶ、潤いのある喜びを体感出来るようになった。ただ、焼成工程だけは教室の都合に合わせ、スタツフに委ねることになるのだが、それが物足りなかつた。倉田は何とか自宅で完成品までやれるようにしたいという欲念が湧いた。車庫の一角三坪を仕切り、工房風にリフォームし、道具類を一式そろえる必要がある。その為の費用の關係で乗り越えなければならぬ壁がある。独断出来ないのが久子の同意を取り付けなければならない。

定年一年前に、長男が結婚し、新居で家庭を持つと車庫に空きスペースが出来た。倉田は久子の機嫌の良い時を見計らって工房の夢を語った。

「まあ、素敵ね。楽しい趣味を持つことは生きがいのための一つの要素だつてセミナーで習つたわね。長い間頑張つてお仕事をしているんだから、それくらいのご褒美があつて当たり前よ」

倉田は「案ずるより産むが易い」を実感した。

彼はリフォームの概略構想図を知人の工務店に渡し、見積を確認してから願望の実現を進めた。

倉田はホームセンターで材料を購入し、陶芸の作業台を自作した。それには久子もやりたいと思えば出来るように二人分のスペースを設けた。

細細とした道具類、粘土、釉薬、手動ロクロ、電動ロクロ、小型電気窯などを順次、教室から購入した。処分する予定だった古い食器棚は、ガラス戸を取り外し道具や書籍などの置き場所に活用した。必要品を並べただけでは殺風景なので、何時だったか大沼からもらった油絵を壁に掛けた。それは額入りの五号カンバスでリングとバナナの静物画だ。バスツアーと絵画が大沼の趣味だと聞いている。

一箇所の隅に三角棚を取り付け、その下に数個のハンガーをぶら下げた。倉田は何時でも陶芸を楽しめる自由時間が十分となる定年を楽しみにしてきた。

倉田の定年退職祝賀会から帰った久子は直ぐ様、花束のラッピングペーパーを外し、倉田が教室で制作した少し大きめの瑠璃色の花瓶に生け、テレビの横に飾った。

「素敵なお花を沢山頂いたのね。嬉しいわ。有り難う」

向日葵、花葱、花車、泡盛草など全て彼女のお気に入りの花のようだった。向日葵は大型の夏のイメージが強かったが、小型の切り花は周年出回っているようだ。頂いたのは花びらが明るいレモン色の「サンリッチレモン」で久子の好みの品種だった。花葱は純白の小花が数十箇集まって放射状に咲き可愛かった。花車は「ソネット」でピンクが可憐だった。泡盛草のふんわりした花穂は和の雰囲気漂っていた。生け花やプランターでの花作りは

久子の趣味の一つだ。倉田と共通の趣味のバスツアーと共に愉悅した。

定年後、毎年一回、倉田は久子と大沼夫妻、白井夫妻の六人で日帰りか一泊二日のバスツアーに興じた。倉田は大抵バスの中央から少し前寄りの通路側に席を取った。後に大沼が通路を挟んだ隣に白井が座った。窓側にはそれぞれの細君が腰を据えていた。てんでに準備したおやつや飲み物を口にしていた。大沼夫妻の好物はお煎餅のようだった。ガイドの話の合間に倉田は白井や大沼と近況報告をしあった。倉田は自宅の工房で陶芸を悦楽しているという話もした。その時、敏江が聞き耳を立てたような気がした。

久子は時々振り向いて敏江と会話をしていた。

倉田は工房で陶芸に没頭することがあるが、家事の手伝いも良くするようになった。これまで家庭内の仕事は時々「ゴミ出し以外ほとんど久子に任せきりで、会社の業務に専心出来たことへの感謝の気持ちからだった。

倉田は主婦の仕事の種種雑多に眼を見張った。それらをそつなく熟しているように見える久子に感服することがあった。

倉田は、天ぷらなど、余り気乗りしない手伝いの時は、それが顔に現れるらしい。すると立ち所に発破をかけられる。

「私が先に逝ったらお父さん全部一人でしなきゃならないよ」

倉田は「はい」と素直に返事した。久子の後に残るような寂しいことなど、考えたくもなかった。大体、統計的に寿命は男より女が長い。まして久子は年下だ。心配には及ばないと高を括った。彼女は続けて言った、

「お父さん一人になっても、再婚したら嫌よ。私、焼き餅焼きだから許さないからね。天国から見張っているんだから」

倉田は「はいはい」と返答した。

ある日、倉田は風呂から上がり寛いでいると脱衣場から久子の

叫び声が聞こえた。

「お父さん、私のパンツ、持ってきて！」

彼は自分の着るものでさえ彼女に聞くことがあったのだ。だから久子のパンツの在り処など知る由もなかった。

「それ、何処にあるんだい？」

とおろおろした。

「納戸のたんすの一番上の引き出しの左端よ」

倉田は言われた引き出しにきちんと置かれた彼女のパンツがあるのを初めて見た。

それ以来、彼は家の中で何が何処にあるのか関心を持つようになった。あのパンツの件は、久子がうっかり忘れたものか、それとも年を重ねる内に、持ちつ持たれつの老老介護となるかもしれないが、頼り過ぎて持たれつ持たれつにならぬように、という戒めなのか、倉田は分からないままだ。

三組の夫婦のバスツアーは数回続いた。しかし、新型コロナウイルスの感染が拡大し、テレビや新聞で、三密を避け不要不急の外出を控えるように呼びかけられてから中断せざるを得なくなってきた。

倉田も久子も、必要な用事以外は他所へ出ないようにした。人が訪ねてきた時は、マスクを着用して対応した。

久子は生け花を楽しみ、倉田は陶芸に浸ることが多くなった。

ある日、倉田が工房を出てリビングに入ると、久子がぐったりと倒れている光景が眼に飛び込んだ。

「お母さんどうしたんだ。大丈夫か！」

と喚いたが、彼女は僅かに微動したただけだった。彼は震える手で一九番を押しした。

「火事ですか？ 救急ですか？」

冷静ではつきりした声が聞こえた。

「救急車お願いします」

倉田は少し落ち着いて住所と彼女の容態を伝えた。

以前、保管場所を確認したことのある久子の健康保険証とお薬手帳を手にし、長男の携帯に掛けた。「どの病院に入るか決まったらまた電話するから……」と言って切った。倉田は彼女の手を握り締めながら、

「お母さん、しっかりしてや！ 今、救急車がこっちに向かっているから……」

と声を掛け続けた。救急車が来たのは十分程度後のはずだったが、彼にとっては何時間にも感じられた。

久子は、長男夫婦、長女夫婦も駆け付けた病院に搬送されてから数時間で息を引き取った。急性大動脈解離だったと告げられた。

自宅へ帰り、喪主を務めることになった長男とセレモニーホルのスタッフが綿密に打ち合わせを始めた。倉田と長女は、ずっと久子の側に居ることが出来た。

規模の大きくない葬儀だったが、大沼夫妻と白井夫妻も参加してくれた。光洋の現・元社員は彼ら二人だけだった。

葬儀が終わった後、三日間、長男の家族が泊まり込んでくれた。その間に、長男夫婦から同居の提言があった。しかし、倉田は何時か施設の世話になるかもしれないが、それまでは思い出の多い、住み慣れたここに居たいことを意思表示した。嫁は倉田の眼をじつと見ながら、

「もし、私達と一緒に住みたいと思うようになりましたら、何時でもおっしゃってください」

と言った。それは決して口先だけではないことを倉田は感じ、涙が出るほど嬉しく、有り難く、心強く思った。

倉田は久子に手伝った家事を思い起こしながら何とか処理した。しかし、戸惑うことも多かった。彼は書店で出会ったへ男やもめのための家事手引を購入し、一気に読破して座右に置いた。倉田は、三日毎に夕食の献立表を作り、材料をそろえておかないと落ち着かなかった。

彼は久子の写真を家のあちこちに立てた。工房の窓際にも飾った。倉田は、久子が今、単身赴任か海外留学で留守にしているのだと思いたかった。

二年の月日が立ち、倉田が古希まであと一年になった春のある日、大沼敏江から突然電話が入った。

「こんにちは。ご無沙汰しています。実は私、陶芸をやりたいのですが、手解きして頂けないでしょうか？」

「えっ？ 陶芸の手解き？」

「ご迷惑でしょうか？」

「いえ、迷惑というより、私は陶芸教室で基礎コースを修了しましたが、何の資格も無いんですよ。それより教室で習った方が良いと思いますが……、私は今も粘土や釉薬など消耗品を購入するため教室へ行くことがあるので紹介してもいいですよ」

「それも考えたんですが、教室に入ると仲間と競争になったり、他の生徒と仲良くやっていこうと気を使ったりするのは苦手なんです。なので、マイペースで倉田さんに教わりたいと思っていますのですが……」

「ま、私で良かったら構いませんが……で、旦那さんも一緒にですか？」

「いえ、主人は一年半前に他界しました」

「えっ？ 大沼さんが亡くなった？ 本当ですか？」

「はい、すい臓がんで、ほんのしばらく闘病しただけで絶え果

てました」

「全然知らず大変非礼をして申し訳ありませんでした」

倉田は電話機を持ちながら、思わず深々と頭を下げた。

「いえ、誰にも連絡せず、家族葬で見送りましたからご存じないのは当然なんです」

倉田は、久子の葬儀に大沼が見えたのが最後になったとは信じ難かった。

「陶芸の件はまたにして、明日にでもお線香を上げさせて頂きたいのですがよろしいでしょうか？」

「わざわざ恐縮ですが有り難うございます。主人もきつと喜ぶと思います」

倉田と白井が、以前何かで大沼に招かれたことがあり、車で二十分程の住居を知っていた。

倉田は敏江との電話が終わると、直ぐに白井へ連絡した。

「大沼さんが亡くなっていたのだが、知っていた？」

「いや、初耳だ、そうかあ……」

「自分も偶然知ったのだが、一年半前だそうだ。それで明日お線香を上げさせてもらうことにしたんだ」

「じゃ、俺も行くよ」

倉田は明日白井も一緒に行く旨を敏江に電話した。倉田はお供え用に、日持ちの良い個包装のお煎餅の菓子折りを準備した。

ご近所の手前、一人暮らしの未亡人宅を訪ねるのに後ろめたさがあったが、白井と同行出来ることになって倉田はほっとした。

彼は、角封筒に〈寸志〉と記し、久子の葬儀の際受領した香典と同額を収め、菓子折りの包装紙の内側に入れた。月日もたっていることなので敢えて〈香典〉とは記さなかった。その方が、香典返しとかに気を遣わなくて済むだろう。そのことを白井に話す

必要はないと考えた。

翌日、倉田は黒のスーツにグレーの地味なネクタイを締め、白井と同時に大沼家へ着いた。白井は、

「本当にご愁傷様でした。倉田さんから聞いてびっくりしました」と敏江に挨拶した。

二人はそれぞれのお供え物を敏江に差し上げた。奥の間に通されると、小さな御仏壇の横に大沼の遺影が飾られていた。敏江が供え物を並べた。線香に火を付け二人は合掌した。倉田は、(お前と一緒に仕事出来て幸せだったよ、有り難う)と念じた。二人はほうじ茶と茶菓子をこ馳走になつてからお暇した。

あくる日、倉田は敏江に電話を入れた。

「昨日はお邪魔させて頂き有り難うございました」

「いえ、ご丁寧にわざわざお越しくださいまして、こちらこそ有り難うございました。その上お志まで頂戴してしまい申し訳ありませんでした」

「いいえ。ところで陶芸の話ですが、何時か私の工房をご覧になつたらどうでしょうか？ 狭苦しい所ですが、それでもよろしかったら練習されてもいいですよ」

「有り難うございます。是非お願いします。明日にでもお伺いしたいのですが……」

「はい、結構です。住まいは、前にご主人と一緒に来られた時と変わっていませんから」

翌日、敏江は打ち合わせた時間に白色の軽乗用車でやってきた。倉田は二年程前まで、屋敷内で家庭菜園に精を出していたが、今は止めてしまいい空地になつている所に駐車してもらつた。彼女はモカ系ハイネックプルオーバーに白柄の映えるデザインの上ツトジャケットを装っていた。

彼は玄関に施錠し、敏江を工房に案内し、スリッパを勧めた。

彼女は「失礼します」と言つて中に入るなり、壁に掛かつた油彩に眼が留まつた。

「あら、これ主人の描いた絵ね」

「そうです。以前に大沼さんから頂いたものです。今は遺作になつてしまひ貴重に思つています」

敏江は、窓際に飾られた久子の写真にも気付き、

「奥様と、もつとお話したかつたわ」

と、懐かしそうに見入つていた。彼女は電動ロクロや電気窯などを物珍しそうに見て回つた。

「素敵なアトリエね。どうかここで習わせてください。月謝もご指示お願いします」

「月謝なんてとんでもないです。元同僚の愛妻の為になるのでしたらそれで十分です」

「では、材料費だけでも払わせてください」

「それは微微たるものですから全然気にしないでください」

「有り難うございます。突然勝手なお願いをしてすみません。よろしくお頼みします」

「何時でも気の向いた時に来てください。動きやすい服装で、上履きと前掛けだけ持ってきてください。ここにはトイレがありませんので、家のを使つてください。場所は前にご主人と来られた時と同じで、そのままです」

倉田は久子の写真の横を指差しながら、

「玄関の鍵はここに置いてありますので自由に使えばいいです」

「明日、ちよつと予定がありますので明後日にお邪魔させてください」

倉田は自身の頭の整理も兼ね、教室で使つた資料を参考に、日付のない概略の計画表を作つてみた。粘土の荒練り、菊練り、玉作りのぐい呑み、ひも作りの湯飲み、タタラ作りの湯呑み、ひも

作りの円筒花器、円筒花器削り仕上げ、素焼き、釉かけ、本焼き、電動ロクロ土ころし、電動ロクロによる飯椀、飯椀削りの順に進めることにした。その計画表を二部プリントアウトした。ハンガーには数枚の真新しいタオルを掛けた。

二日後の昼過ぎた頃、敏江は薄茶色のジーパンにパープル系のジャケットを羽織り、手提げ袋を持って到着した。

倉田はスリッパに、彼女はズックに履き替え、工房に入った。敏江はジャケットを脱ぎ袋から取り出した上ツ張りを着た。倉田は、

「ジャケットはそのハンガーに掛けたらいいですよ」

と言うと、彼女は「はい」と従った。更にブルーの前掛けを首から下げ、腰のひもを締めた。

倉田は、二箇の粘土を用意した。

「初めに粘土の荒練りをしましょう」

と言うて見本を見せ、横に並んだ敏江に真似させた。荒練りは然程難しい作業ではないので、彼女は何度か繰り返し一応仕上げた。

「次に菊練りもやってみましょう」

これは幾らか厄介な仕事なので、倉田はゆっくりと進めた。敏江は結構器用な手付きで彼に付いてきた。その日は無理だろうと思っていた巻き上げまですることが出来た。

「なかなか上手いものですね。これまでにやったことがあるんですか？」

「随分昔、三十年余り前かな、教室でちょっと習い始めたことがあったんですが、子供ができてそれっきりになっちゃったんです」

「そうですか。今日はここまでにしましょう」

二人は粘土をラップフィルムに包み、直方体のプラスチック容

器に仕舞った。これは次回の練習に使うことになる。倉田は手を洗い、ハンガーに掛けておいたタオルを指して、

「これ使ってもいいですよ」

と言うと、敏江は、

「大丈夫です、用意してきましたから」

と袋から出したタオルで手を拭いた。彼女はてきばきと後片付けや掃除をしてくれた。倉田は、

「これからの工程の計画をメモしておきましたから持つていてください」

と言うて手渡し、

「これは基礎的な技法で、これをマスターしたら、後はそれを応用し、自分で考えたり参考書を見て自由に制作すれば良いのです」

と言いつ、棚の図書を指差し、

「参考に見たい本がありましたら貸してあげますよ」と言った。敏江は覗き込んで、

「じゃ、これお借りします」

と〈陶芸の初歩〉を取り出し、袋に入れた。工房を出る前に、

「すみませんがズックを置いていってもいいですか？」

と言うので倉田が了解した。彼女が当分続けたいという志の表示のように感じられた。

倉田が「お疲れさんでした」と言うと、敏江は「有り難うございました」と深く頭を下げて帰った。

彼は、敏江が人目を気にせず出入り出来るよう、工房の入口に〈倉田陶芸教室〉と、余り目立ちほしくないが、適当に手作りした看板を勝手に掛けた。

敏江は週に一回か二回通った。前日には必ず倉田の都合を電話で確認した。彼女は倉田の計画表の通り、順調に習得していった。

時々ノートにメモをしていた。

ある日の帰り際に、

「これ、頂き物ですが召し上がってください」

と、袋の中から伊勢名物のお福餅の箱を差し出した。

「やあ、それはどうも有り難う。中でお茶を入れますから一緒に食べませんか？」

「まあ、いいんですか？　じゃ、お言葉に甘えてちよつと失礼します」

倉田はお福餅の包装紙を解いた。二人はリビングのL字形に配置されたソファーに掛けてティータイムに逸楽した。敏江は久子の指定席だった場所に着いていた。

倉田がお福餅の菓に眼をやっていた間、会話が跡切れた。が、少しも気詰まりな雰囲気にならなかった。工房の中ではこれまでに味わったことのない平穏な空気だった。

二週間程たったある日、敏江が帰ろうとした時、倉田が言った。

「おとつい、長男からもらった、西宮の焼き菓子が残っているんですが、コーヒーでも飲みながらたべませんか？」

「あら、そうですね。それじゃ、ご馳走になります」

二人はたわいない世間話を交わしながらコーヒータイムに快楽を味わった。倉田はふと、暫く留守にしていた久子が帰ってきたかのような錯覚に陥ることがあった。彼は、

「長男に、あなたが陶芸を習いに来ていることを話しておきました」

と言った。

三箇月程すると、基本的な練習の計画も大詰めに近付いた。そんなある日、練習を終えた敏江に倉田は言った。

「折り入ってお願いがあるのですが、中で聞いていただけませんか？」

敏江は何のことやら見当がつかない風だったが彼に付いて家に入った。

「あなたと親友になりたいのですがお願い出来ませんか？」

「えっ？　親友ですか？」

（このじいさん、唐突に何を言い出すのか）

とあきれ返ったかもしれない。彼女はもう二度と工房に入るこゝとがなくなるのではないだろうか。それとも喜んで（親友ではなく、いつそのこと再婚しませんか？）とでも言われたらどうしよう。倉田は、一人になっても再婚しない、と久子と約束している。その約束を順守したい。敏江が口を開いた。

「実は主人の一周忌が過ぎた頃、ある男性と時々会っていたことがあります。女性にはない考え方や意見が魅力的でした。ところが次第に彼の色気めいたものを感じ始めました。友達でいたかっただけでしたが（これはまずい）と思い、その後会うことをしませんでした」

「そういうことがあったのですか。私の知り合いで、綺麗な女性を見ると、どうしても性的な対象に見えてしまうという人がいました」

敏江は顔をしかめた。

「そういう人も居るなんて、私には信じられないことです」

倉田は、更に続けた、

「私は今、何とか日暮らしていますが、どこか満たされないものがありました。それは気軽に話し合える異性の友人がいらない切なさだと気がきました。あなたと居ると、男同士の会話では聞くことのない話に触れ、心が和むのです。是非とも私の親友になつて頂けませんか？」

「私は倉田さんの弟子だと思っています。それが親友に昇格出来るなんて、有り難く、もつたいなく、夢のようです」

敏江はじつと倉田の眼を見つめていた。

「何時か二人共、施設のお世話になるようなことがあったら、同じ所に入りたいです。そこでも親友でいて欲しいです。この世を卒業することになったら、私は久子の下へ行きます。あなたは大沼さんの所へ行ってください」

「まあ、随分先のことまでお考えになるんですね」

「いや、随分先かどうかは分かりませんよ。元日の能登半島地震の一箇月余り後に川柳で〈日本中明日は我が身の震度七〉というのを見たことがありますから……」

「まあ……怖いけど、本当にその通りですね」

彼女は気持ちを落ち着かせようとしてか、大きく息を吐いた。

倉田が言った。

「あなたと親友になったことを、白井さんに話してもいいですか？」

「ええ、いいわ。変に邪推されるより〈親友公表〉をしたいと思います」

倉田は次第に生き生きとした表情になった。

「コロナ禍が完全に収束したら、一組の夫婦と一組の親友カッブルの四人でまたバスツアーに参加出来たらいいですね」

「そうですね、楽しみに待ちましょう」

倉田は、敏江と親友なら久子も許してくれるだろうと解釈している。「お母さんとの約束はちゃんと守っているからね。愛しているよ」久子の遺影に話し掛けることがある。

